備える 3.11から　第97回　想定シリーズ⑥　津波（上）

1メートルでも一命取る

南海トラフ巨大地震への備えを考える物語風の連載。今回のテーマは、ついに「津波」です。国の被害想定は津波だけで最悪二十三万人の犠牲者を見込む一方、避難を徹底すれば半減できると試算しています。津波の特性や、地域ごとの被害の違いを知り、それぞれに応じた対策を考えます。（赤川肇）

静岡県の駿河湾に面した内海だから、夏休みで実家に帰省した津波さんは即答した。「ほいでも、一メートルの津波太郎さんこが、幼なじみと旧交を温めていた。小学校教諭として母校に勤める岸近守さんこだ。

「南海トラフ地震が起きると、静岡は三〇メートルの津波が来るらしいじゃんか（メモ①）。ここは大丈夫？」と備吉さん。岸近さんは「ここらの想定は約一〇メートル。ほいでも、一メートルの津波が数分で来るらしい。到達時間の速さ（メモ②）も問題なんだ」とため息を漏らした。津波対策として学校や、備吉、おまえが今、住んどる愛知県の家も海沿いだよな？」

三河湾に近い一戸建て住宅に住む備吉さんは即答した。「うちは大丈夫だ。三河湾は渥美半島と知多半島に囲まれた内海だから、この前、新聞で見たけど、津波の到達まで最短で一時間あるし、津波の高さも最大一メートル未満だって。津波が来るまでに、家族全員で逃げられるから、津波が来ないうちに、高台に逃げるつもりだ。」

見舞われたのは、夏休み明けから間もない平日。午後一時ちょうど、南海トラフ地震が発生した。

「津波が来る。屋上に行くぞ！」。岸近さんは駿河湾に臨む校舎一階の教室で、訓練通り子どもらに救命胴衣を着させ、努めて冷静に誘導した。

屋上にたどり着くと、港の堤防を越えた黒い津波が「ゴー！」と音を立て、車や民家をのみ込んだ。あっという間に校舎一階の窓も破られ、ガラスの割れる音が響いた。一間一髪だった。

いつもの通勤路は、マンホールが飛び出したり、海側から逃げてくる車で渋滞したり…。遠回りを繰り返して自宅に着いたとき、時計は午後二時。実際に津波が来た！　が、予想より勢いはなく、ひざ下の高さにとどまった。ハロは大小量の水で叫び続けていた。

「ふう、この程度で済んでよかった」。水はすぐ引き始め、ハロを連れだそうと思いながらできなかった。

「一！」。建設作業の安全講習で以前、低所からの落下事故も命にかかわるという標語を聞いたのを、ふと思い出した。「津波も同じかも！」。建設作業の安全講習で以前、低所からの落下事故も命にかかわるという標語を聞いたのを、ふと思い出した。「津波も同じかも！」。流れにあらがう。助けて！」と大声で叫ぶと、「え、津波…？　だって、何とかなる！」。自分にそう言い聞かせ、海側の自宅へと走りだした。

「ハロは逃げられん！」。時とした時だった。「ゴゴゴゴ…」。不気味な音に海側へ振り向くと、高さ二メートルほどの濁流が押し寄せてきた。